

2023

令和5年10月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻362号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあるお



公益財団法人



公益財団法人
さわか福祉財団



始まりました！

いきがい・助け合い オンラインフェスタ

2023

すべての人が幸せに暮らせる社会へ

10月2日（月）から10月16日（月）まで
連日多様なプログラムを配信！

オープニング フォーラム

「出会い・ふれあい・助け合い 地域共生社会を
みんなでつくるための提言」の様子から

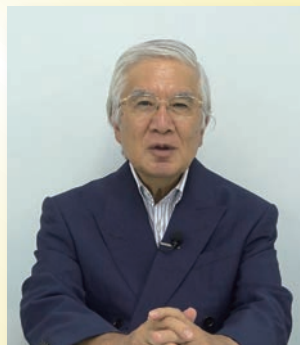
（左は進行役の中央大学法学部教授・宮本太郎さん）



11人の皆様から、これからの社会のあり
方、地域づくりに関する応援メッセージ
も寄せられました

（右は、初日の応援メッセージの様子から。
埼玉県立大学理事長・田中滋さん）

本フェスタの概要は、
後日当財団のホームページや本誌等
で紹介いたします



さあ、言おう

2023年10月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

その相談窓口、地域とつながっていますか？

清水 肇子

4 助け合い こんな活動やっています！

認知症サポーターが 生活支援ボランティアで大活躍

おれんじボランティア（岩手県矢巾町）

8 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

お寺を子どもの居場所に 宿題支援に加え郷土愛も育む

北船木高齢者支援の会 ― 宿題支援 “寺子屋”（滋賀県高島市）

12 「地域助け合い基金」 助成先のご紹介／状況のご報告

16 連載 33 老いの暮らしを創る

先送りしない

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

18 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 14

学び直し

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

新しいふれあい社会づくりに向けて

22 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

23 活動日記（抄）

⑩さわやか書棚

⑬みんなの広場 / 投稿募集

⑭さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 金澤 泰子

その相談窓口、地域とつながっていますか？

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

この仕事をしていると、いろいろな方から個別の相談を受けることも多い。中高年の方であれば、地域活動への参加方法をはじめ介護保険や各種の福祉サービスの利用申請だったり、遺言書のつくり方から相続、散骨や墓じまいについてなど、日頃の暮らしに直結している事柄から終活まで多岐にわたる。もちろん尋ねられたすべてに詳細な知識があるわけではないから、そんなときは悩みを聞きつつ私なりに問題を整理して、どんな対応が考えられるかの選択肢をできるだけ具体的にお伝えするようにしている。どの窓口や団体に、どのような言い方で相談をすればよいか、お願いを受けてパソコンで一言一句を打ってお渡ししたことも少なくない。急を要するようなことであれば直接仲介することもある。

こうした情報は、今はネット上に事例も含めて相当な量で紹介されている。多くの自治体も行政サービスの利用について丁寧かつ詳細に広報しているし、さらに何とか相談のハードルを下げようと、総合相談やワンストップ窓口の仕組みを広げてきている。それでも、もっと早く相談してくれれば、と関係者が後悔するような事案が後を絶たない。何が課題なのか？

受け皿の充実はまだまだ必要だ。数はもとより、相談のアクセスのしやすさは重要な要素と

なる。多くの公的窓口相談は平日の朝から夕方まで。週末に時間を決めて対応しているところもあるが、それでも問題を抱えている人が相談しやすい環境とはいえない。相談は総合的に受け付けても実際の支援サービスはバラバラで効果的に機能していない場合もある。そして何より、精神的な壁の問題が大きい。この要因と解決策を私たちはもっと深く真剣に掘り下げて考えていく必要があるだろう。

よく言われることだが、細かく話を聞いてみると、家の中の家族の問題、生活支援の相談をすること自体が恥ずかしい、できればしたくない、という気持ちが続いて見ることが多い。相談窓口に意を決して出かけたがうまく状況を説明できずに様子を見ましようと言われ、絶望感から自殺しかけた人もいた。多くの場合、「支援が必要な人ほど相談すること自体が苦手」だ。では地域で何ができるだろうか。24時間いつでも連絡をくれていいですよ、と携帯番号を公表している助け合い活動の関係者の方にこれまで何人もお会いした。それって大変ではありませんか、と尋ねると、「実際にはそれほど連絡はないんです。安心感ですね。これまで夜中の緊急は1〜2件くらいです」とこともなげに語ってくれた方がいた。「日曜日は包括が休みなので代わりに受けて月曜日につなぎました」とパネルトークで笑顔で語ってくれた人もいた。事務局で何人かが当番制で交代して担当している例もある。行政だけで24時間相談対応するには相当なコストが必要になるが、地域の取り組みとつながっていけば、それも不要となる。実際にこの皆さんは包括や社協や地域の医療関係者とも日頃からしっかりつながっていた。

専門の相談コーディネーターを充実させてもやはり限度がある。『非定型のつなぎ』の有効性は、まだあまり表に出て評価されていないが、地域での助け合いにはこうした重要な機能がある。専門職の皆さんはその点を理解しながら、ぜひ一緒に活動の広がりを支援してほしい。



認知症サポーターが 生活支援ボランティアで大活躍

おれんじボランティア (岩手県矢巾町^{やはらぎ})

認知症サポーター養成講座を修了した住民たちが、介護保険でカバーできない生活の困りごとを解決するために活動しています。町の総合事業にも位置付けられている貴重な取り組みを取材しました。

(取材・文/境 朗子)

ボランティアさんなら
住民同士、気が案かも

「見事にお庭の手入れをされていますね」

おれんじボランティアの一人が感嘆の声を上げると、水本さん(91歳)は目を細めた。剪定が得意な水本さんは、年相応の物忘れなどはあるが、その腕は落ちていない。おれんじボランティアが週に一度自宅を訪問するようにな

ってから、水本さんはひげを剃るようになった。

「主人は身だしなみを整えてお迎えしています。生活にメリハリがつくようになりました」と水本さんの妻(87歳)は笑顔を見せる。

水本さん夫妻が2人で暮らす家は、田園地域に都市部がほどよく調和する美しい町だが、水本さん宅のエリアでは交通手段がタクシーしかない。だから年齢とともに人との交流が途絶えが

ちになり、寂しが増していた。そんな折、妻が足を骨折し、介護保険サービスを受けることになった。夫も、総合事業の訪問型サービスBに位置付けられているおれんじボランティアの生活支援をケアプランに組み入れた。

当初は、他人に家の中のことを任せるのは…と感じたが、夫妻を担当するケアマネジャーで認知症地域支援推進員の村松あゆみさんから支援内容の説明を聞き、「同じ町の住民同士だから



おれんじボランティアの生活支援の様子。今年8月のおれんじボランティア利用者は13名、活動回数は延べ35回



おれんじボランティアの早坂さん（左）と冨手さん（右）

ご主人と一緒に
行ってみて」と
さりげなく勧め
る。
冨手さんは、
「専門職ではあ
りませんので、
自分の日常生活
でやっている家

事でお手伝いしています」と話す。認知症の人でもそうでない人でも、向き合う姿勢は同じ。もし同じことを何度か聞かれたら、その都度丁寧に答えればよいだけ。ただ、認知症の人の支援の場合は、本人が混乱しないように、部屋の物を動かしたら必ず元の位置に戻すことなどを心得としている。

話が合いそうだし、気が楽かも」と思ったという。村松さんは、「おれんじボランティアさんの訪問が、水本さんの孤立防止にもつながると思えました」と話す。
おれんじボランティアの生活支援は2人体制。1時間程度1回500円の

有償ボランティアだ。2人だと短時間で手際よく作業が進み余裕ができ、水本さん夫妻は、そのプラスアルファの時間を毎回心待ちにするようになった。
取材当日、おれんじボランティアの早坂英子さん（68歳）と冨手千賀子さん（73歳）は、掃除機かけと風呂・トイレ掃除を分担。それぞれの作業が終わると、みんなで井戸端会議が始まった。この日の話題は、妻の水本さんが好きな手芸。早坂さんも同じ趣味を持つから自ずと話が盛り上がり、「良い材料が100円ショップにあるので、



掃除が終われば、皆で楽しいおしゃべりタイム。水本さんが作成中のブローチが話題に上った

「私たちが手伝いましょう！」 動き出した認知症サポーター

矢巾町では、早くから地域全体で介護予防や認知症啓発に取り組もうという気運が醸成されていた。

「おれんじボランティアの出発点は、2012年に開催した『家族介護者の集い』です」と、地域包括支援センター



鱒沢さん（左）と村松さん（右）。「ボランティアさんの『楽しい』という言葉が一番うれしい」と鱒沢さん

ーでおれんじボランティアの事務局を担当する鱒沢陽香さんは話す。認知症の親や配偶者を介護する家族は多く、同じ立場の人同士で悩みを話したり、情報交換する場として「集

い」は定着していった。

15年、「集い」は認知症カフェに生まれ変わり、それまで参加してきた家族介護者たちは、カフェに来る人たちの聞き役となった。認知症サポーター養成講座を受講し、カフェの運営に携わるようになった。

カフェでは、認知症の本人や家族が抱える困りごとがたびたび話題に上った。「介護保険のヘルパーさんに仏壇の花を買ってきても頼んだが、だめだった」「植木の水やりも、制度でできなかった」——。困りごとは山のようにあった。「それなら、私たちが手伝いに行きましょう！」

話が進み、カフェの運営に携わっていた人たちが仲間を募って生活支援を行うボランティアグループをつくることになった。認知症サポーター25名が集まり、新たに包括が設置したボランティア養成講座を修了して、16年11月、「おれんじボランティア」が発足した。

「欠かせない住民主体の活動 訪問Bにも位置付けられる

活動を始めてみると、掃除やごみ出しといった生活支援への依頼はみるみる増えていった。

「要支援1の高齢者がいるが、週1回程度しか訪問介護を利用できない。もつと支える必要があるのに、どうしたらいいのか」。ある地域のケアマネジャーから、鱒沢さんにそんな相談が寄せられた。介護保険による専門職の支援にはどうしても限界がある。少子高齢化は進み、介護職人材不足も深刻だ。おれんじボランティアの出番だった。

「認知症の人たちの生活上の望みは、叶えられているのか。枠を超えた柔軟な生活支援対策が必要だと感じました」と鱒沢さんはきっぱり。そして行政も、住民によるこの取り組みを高く評価。今後の矢巾町に欠かせない貴重な活動として、17年10月、総合事業の

訪問型サービスBにも位置付けた。

「専門的な支援は専門職に任せ、おれんじボランティアさんには生活を豊かにする部分を手伝っていただけたら」と鰯沢さん。園芸が趣味の人なら、草を取ってほしいし、苗も植えてもらいたい。犬を飼っていたら、予防注射に連れて行ったりしてほしいはず。

「ヘルパーさんが制度上対応できないサービスにこそ、ボランティアの思いがあるし、個性が発揮できます」

現在、おれんじボランティアは50名まで増え、スタート時の2倍。年齢層も50代から80代まで広がった。人間関係が原因で介護の仕事を辞めた後、1年ほどおれんじボランティアをしたら自信が戻って復職し、かつボランティアも継続中という人もいる。利用は認知症の人に限定していない。人となりが、互いに必要とされる実感がボランティアたちに元気とやる気をもたらすのだらう。

前出の早坂さんは、おれんじボランティアに参加した理由をこう話す。

「遠方の実家で暮らす母親を十分看られなかったという思いがあります。母は地元の誰かにお世話になりました。だから私も、地元で誰かの役に立ちたいのです」。いわば「恩送り」なのだという。「いずれ自分も、必ずお世話される側になりますしね」

認知症の人にも活躍してもらおう 矢巾町チームオレンジ

全国で活動が進む認知症サポーターの「チームオレンジ」には、認知症の人も参加することが推奨されている。

「矢巾町でも、認知症の方が活動されているんですよ」と鰯沢さん。「野菜の苗を植えてほしい」「草取りをお願いしたい」など、一般家庭などから単発の依頼があると、おれんじデー（認知症の人と家族が集う取り組み）などに参加している認知症の人たちに声を

かけ、おれんじボランティアや包括職員と一緒に駆けつける。「体で覚えておられるので、とてもお上手です。ご本人たちは感謝されるし、『いつ呼んでくれてもいいよ』と喜んでくださいます」

今後、もっともつと特技を生かして、地域で活躍してほしいと鰯沢さんたちは考えており、「認知症の人だけでなく、障がいのある人、子育て世代などにも広げていきたい」と語る。誰にでも、地域で活躍できる場と可能性がある。矢巾町では、地域共生社会の実現を目指して、みんなが自分を生かし、活躍し続けていくのだらう。



認知症の人も地域の大切な担い手だ

／いきいき わくわく／

子どもと一緒に 地域で輝こう



お寺を子どもの居場所に 宿題支援に加え郷土愛も育む

北船木高齢者支援の会 ― 宿題支援 ♪ 寺子屋 ♪ (滋賀県高島市)

少子高齢化、過疎化が進む中、「子どもは地域の宝」と、お寺の本堂に地域の小学生を集めて宿題支援や郷土愛を育む活動を行う「北船木高齢者支援の会―宿題支援 ♪ 寺子屋 ♪」。3寺院の協力のもと、元教員や住職を含む4人のメンバーの活動に対する思いと、子どもたちが地域の中でいきいきと学ぶ様子を取材しました。

(取材・文／長島 ともこ)



今回の“寺子屋”の会場、光明寺

● お寺の本堂で宿題に集中

滋賀県の北西部、琵琶湖のほとりに位置する高島市を南北に走るJR湖西線安曇川駅から車で約10分。のどかな田園が広がる北船木の集落の一角に、“寺子屋”勝専寺・願船寺・光明寺がある。

取材に訪れたのは8月。この日の会場は光明寺。

午後3時近くになると、夏休みで日焼けした小学生たちが本堂に集まってきた。この地域には小学生が13名おり、この日参加したのは、1年生2名、4年生2名、6年生2名の計6名。用意された学習スペースに着席し、各自夏休みの宿題に取り組む。御本尊がある「お寺の本堂」という空間が集中力を高めるのか、一人ひとりが一心不乱に学び



お寺の本堂で夏休みの宿題に取り組む子どもたち

に向き合う姿が印象的だ。

元中学校国語教諭であり代表の駒井正一さん（74歳）、元小学校教諭で光明寺住職の松林尚真さん（68歳）らスタッフは、子どもたちの様子を見守り、「指示出し」ではなく「質問を受けヒントを与える」というサポートに徹し、丸つけの際は、「字がきれいに書

けたね」などと子どもの良い点を見つけ、声をかけている。

●「子どもたちは北船木の宝」

「会の名前にある通り、もともとは高齢者支援団体として、草刈りや家の片付けなど地域の高齢者の困りごとを手伝う活動や、区の事務所において自宅で採れた野菜の販売などを行っていました」と話すのは、事務局の駒井与四和さん（71歳）。

「高齢者支援ももちろん大切ですが、高齢化と少子化が同時に進む中、交通の不便などにより過疎化も進む北船木の未来を担うのは、子どもたちです。地域の宝である子どもたちを、地域の力で育てる取り組みの必要性を感じました」と、駒井正一さん。

お寺は、昔は地域の子どもたちが境内に集い遊ぶ場所でもあったが、今は塾や習い事に行く、家でゲームをするなど子どもたちの放課後の過ごし方が変わってきた。「地域の子どもが集う場としてお寺を活用できないか」「元教員として子どもたちにできることはないか」などと議論を重ねるうち、「寺子屋という形でお寺に子どもたちの居場所をつくり、宿題支援を行ったらどうか」という駒井与四和さんのアイデアに、住職の松林さんも賛同。約1年の準備期間を経て、2022年4月から、宿題支援「寺子屋」が始まった。北船木には光明寺を含めお寺が3つあることから、他の2つのお寺の住職にも協力をお願いして、月替わりで本堂を提供してもらい活動している。

● 諏訪踊りに築^{やな}。郷土愛を育てたい



諏訪踊りの練習。郷土の伝統を引き継ぐ



休憩時間はみんなで境内で遊ぶ

「寺子屋」は、学校がある期間は毎週水曜日の午後3時10分～4時30分、夏休みは約10日間、朝の時間帯を中心に、また、不定期で午後も活動を行う。

この日、子どもたちは勉強の後、休憩も兼ねて境内でボール遊びに興じ、本堂に戻っておやつタイム。その後は、駒井正一さんによる「花咲山」の紙芝居、また、盆踊りの参加に向けて、地元にて代々受け継がれている「諏訪踊り」の練習、郷土の歴史や名所などを題材に地元の教員により作られた「北船木カルタ」を楽しんだ。ちなみに、松林さんとメンバーの本田幹雄さん（63歳）は、「諏訪踊り保存

会」の会員でもある。

小学1年生から6年生という異年齢の集団で過ごすため、高学年の子は低学年の子をいたわり、低学年の子は高学年の子が真剣に勉強する様子に刺激を受けたり時には甘えたりする姿が微笑ましい。

ほかではなかなか経験できない異年齢交流に加え、諏訪踊り、北船木カルタなど郷土学習を行っているのも「寺子屋」の大きな特徴だ。今年7月の郷土学習では、箆^すを扇形に設置して川の水をせき止め、琵琶湖から遡上してきた鮎を川岸に追い込んで捕らえる伝統的な漁法で千年もの歴史を持つ「築」の見学にも出かけたという。

「子どもたちに『北船木で生まれ育って良かった』と思ってほしいのです。『地域のおっちゃん



駒井正一さんによる紙芝居



郷土愛がちりばめられた
「北船木カルタ」

んに地域のことを教えてもらった』『お寺で勉強したり、境内で遊んだりした』という経験が記憶として心に刻まれ、郷土愛を育む一助になればと思っています」(駒井正一さん)

●活動は、徳を積むことと思って

“寺子屋”に通う子どもたちからは、「分からないところをいつも優しく教えてくれる」(2年生)、「勉強の後のおやつ時間が楽しい」(1年生)、「宿題だけでなく、郷土学習や昔遊びができるのが楽しい」(6年生)という声が聞こえてきた。

保護者からは、「忙しくてゆっくり宿題を見られないので、ありがたいです」「子どもが“寺子屋”から帰ってくるときは、いつも笑顔なのうれいです」「私も北船木出身ですが知らないことも多く、こんなふうに地域の伝統をつないでいけるのは素敵なことだと感じています」などの声が寄せられている。

男性4名を中心とするメンバー構成で、「価値

観の違いから(運営面で)意見が分かれることもある」というが、それは、地元愛、地域の子どもたちへの熱い思いがあるからこそ。言葉の端々から、お互いの思いを分かち合いながらより良い活動を目指そうとする、チームワークの良さが伝わってくる。

「活動を通して子どもたちとの距離が縮まり、保護者の方もあいさつしてくださるよう

になりました。地域に新たなつながりができるのはうれしいものです」と、駒井与四和さん。松林さんも「地域のため、子どもたちのために自分の時間を使うということは、徳を積むこと。それが活動の意欲になっています」と話す。

「女性スタッフの確保」を今後の課題に掲げつつ、地域の子どもたちの学びを支援し郷土愛を育むことを目標に、“寺子屋”の挑戦は続く。



(写真左から)

本田さん、駒井与四和さん、駒井正一さん、松林さん

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごとと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、マイカーによる移動支援、子どもたちの見守り活動、子ども食堂や自習室などの居場所づくり活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

秋田県秋田市

町内の歩行困難者などに マイカーで移動支援を

八幡田移動支援ボランティア

助成金額 15万円

民生児童委員である団体関係者が、歩行困難から外出がままならず買い物・通院・墓参等に不便を感じている住民

が多いことを知り、町内有志に移動支援ボランティア参加を呼びかけ、利用したいという住民もいたことから立ち上げたのが、八幡田移動支援ボランティアです。ボランティアが自分の車で、介助しながら移動を支援しています。

本基金の助成金は、活動のためのパソコンやプリンター、車両の表示マグネット、文具等の購入に充てていただきました。

利用者からは「このようなシステムが欲しかった」「大きな物、重い物を気楽に買える。買い物を楽しめる」「タ



移動
支援の
様子

クシー利用時は、近くなのでドライバーに気を遣っていた」「顔見知りの人がボランティアで頼みやすい」「お茶飲み友だちとこの活動を話題にしており、将来利用したい」などの声が聞かれるそうです。

このような活動を近隣の町内会などにも普及させたいと考え、活動スタート前から関係機関団体の会議等で趣旨をアピールしてきたとのこと。また、利用したい思いがあっても、遠慮や気恥ずかしさが払拭されていない感じがあり、PR不足もあると認識しているため、今後は実績を積み重ねて自信を持ち、積極的に動いていきたいと考えているそうです。



おそろいの防寒ジャンパーで
子どもたちの下校を見守り

向館町内会防犯協力会では、これまで月初めの金曜日の夜に、歩いて防犯パトロールを実施してきました。昨年、市内の学校に誘拐予告メールが届いたことなどから、同年7月、地域の小学校から子どもの見守りを強化してほしいとの依頼がありました。また町内会の協議体でアンケート

を実施したところ、「子どもたちの安全見守り活動が必要」との声が多数上がったことから活動を開始。下校時刻に合わせて12名の隊員が当番制で2名ずつ通学路に立ち、交差点の横断補助や低学年児童の下校補助を行っています。

この地域は山からの西風が厳しい場所にあり、冬季の活動のために、また、服装を統一することで児童や保護者、活動者も安心できるだろうと、本基金の助成

福島県郡山市

子どもたちの安全のため見守り活動 そろいのジャンパー着用で周囲も安心

向館町内会防犯協力会

助成金額 15万円

金でおそろいの防寒ジャンパーを購入されました。

このため冬季も変わらず活動でき、ジャンパーを着ていることで安心して児童や地域住民がいささつしてくれるそうです。さらに、見守り活動が地域の情報交換の場にもなっており、つながりづくりにも一役買っているとのこと。

より多くの目で地域や子どもたちを見守れるよう、活動参加募集や、住民による庭先からの声かけのお願いを通信で発信しており、散歩パトロールの提案も出るなど、地域をより良くしていこうという気持ちで住民にも芽生えているそうです。今後は横のつながりを強化し、他の町内会など地域全体に活動を広げたいということです。

埼玉県滑川町

地域で子どもたちを育て合うために 子どもと保護者の居場所づくり

一般社団法人チーム森もり

助成金額 9万9000円

チーム森もりは、元教員や主婦、元民生委員、たくさんの地域住民などの協力で、「森もりハウス」を拠点に、放課後児童クラブ、子ども食堂、自習室（学習支援）&プレ

イルーム開放などの活動を行っています。滑川町は、転入してくる世帯が多いものの、新住民が地域の人たちと関わる機会が少なく、小学生以上が対象の児童館や大きな公園もほとんどないということで、「滑川町にもっと子どもの遊び場や家族の居場所が欲しい。もっと地域の方と一緒に子どもを育て合いたい」という代表者の思いから立ち上げられた団体です。

本基金には、子ども食堂と自習室を持続可能なものとするために応募され、助成金は、食材費、教材費、チラシ印刷費、ボランティアへの謝礼等として活用していただきました。その結果、昨年12月から今年3月までにのべ128名が子ども食堂やお弁当配布を利用、イベントも開催しながら保護者と子育ての悩みを共有しました。また、自習室&プレイルームでは、子どもたちが自由に過ごし、高校生や大学生のボランティアもいて、助成金で購入した参考書を中学生が利用できるとなっています。



子ども食堂の様子

「地域助け合い基金」 状況のご報告

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。

9月15日までの状況をご報告いたします。

(9月15日 当財団ホームページ開示時点)

◎寄付受付額

219件

3190万6836円

このほかに当財団より1億4000万円を供出

◎助成実行額

1008件

1億5770万9034円

地域助け合い基金は、地域共生社会の実現を目指し、助け合い活動のスタート・継続を支援しています。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。

(事務局長・内田)

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、
およびクレジットカード決済は、
QRコードもご利用
ください！

基金に関するご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

「身近な高校生や大学生が子どもたちのロールモデルとなり、地域の方が保護者の方たちとつながる様子を見て、多

世代でつながれる子ども食堂の意義を強く感じました」と
報告を寄せてくださいました。

先送りしない

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

電話に出た途端、「あら、元氣だったのね、よかったあ」という古い友人の声。「この年になるとね、ご無沙汰していると電話をかけるのが怖くなるのよ」と、お互いの息災を喜び合いました。若い頃はどんなに連絡がなくても相手は元氣にいるという確信がもてたのですが。

亡くなった母が、今の私とちょうど同年の頃電話がかかってくるたびに「あーあ、またお葬式の連絡だわ」と、寂しそうに呟いていました。いつにない姿でした。母のその時が、今の私に重なります。親を送り、次は同世代の友人・知人との別れ。

白血病で治療を続けていた親しい友人が、

8月5日に亡くなりました。余命3か月と宣告されながらも3年間、25回もの抗がん剤治療を続けてきたのです。病院から介護施設に移り、部屋の写真が送られてきたので「伺っていいか」とメールを入れた3日後のことでした。

心底減入りました。60年近い付き合いのあった友人との別れは想像以上で、猛暑の中、葬儀場から家に戻っても気持ちがふわふわとつかみ所がなく、喪失感から抜け出せません。夕食をホームの仲間ととり、他愛ない話をしているうちに何となくほぐれてきました。

我が身の最期については日頃それなりに準備しているつもりでしたが、結局それは気持





ちだけであって先送りしているにすぎないということ、今回気づかれました。最も厄介だと思うのが死後の事務処理。

死後の事務処理というのは通常は親族が行いますが、葬儀の手配や納骨、公共料金等の多岐にわたる支払いや解約、遺品の整理や処分、さらにはデジタル関連の処分等、膨大な死後の事務作業を、第三者と契約し肩代わりしてもらう生前契約です。友人の場合は、相続人である子どもたちがいま頭を悩ませています。

友人は働いていたので自分の資産がありました。趣味も広く人間関係も豊富です。しかし遺言もありませんし、お墓の準備もしていませんでした。身近にいた子どもといえども親の全てがわかっていないわけでなく、時折私のところにも確認の問い合わせがあります。その作業を折々の連絡で聞くにつけ、それがどれほど煩雑で膨大な作業であるか、私はわ

かっているようで、我が身に引きつけて考えたことはほぼなかったと言えます。

相続人のいない私の場合は、従妹がやってくれることになっています。しかし「大丈夫よ。任せておいて」という言葉を真に受け、「ありがとう」の一言で頼んでいいものかと、いくら身内とはいえ気になります。年の差があまりなく、必ずしもアテにできるとは限らないということもあります。

今年、3歳上の友人が「死後事務処理」の委任契約を、ある法人と行いました。妹さんから「自分で自分の身の始末はしておいてほしい」と言われたことがきっかけといいます。「これで突発的なことが起こっても安心。迷惑かけずに済むし、肩の荷が下りた」という言葉には実感がありました。やるべきことは先送りにしない。元氣だからこそ、自分の最期にきちんと向き合えるのだと、言い聞かせています。



（むらた さちこ） 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退職後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

人生 | ジェンダーの
視点から
100年時代を
生き抜く知恵 14

学び直し

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規出版）、など多数。

私が客員教授を務める東京家政学院大学では、大学院のコースを一般に公開し、科目等履修生として受け入れることになった。発足したのは昨年からだ、理事長や学長を交えて話し合ったのは1月も半ばのこと。募集開始は2月半ばだから1か月しかない。卒業した大学に頼んで卒業証明書や成績証明書を取り寄せるには、とうてい時間が足りない。事務に頼み込んで、必要書類は締め切りを過ぎても受け付けるといふ特別の配慮をしてもらった。

募集のチラシを作成して広報するには、まったくの時間不足。そこで関係者で手分けし、個別に頼み込んで応募してもらうことにした。幸いある金融機関からの支援金を得られたので、入学金と授業料は無料。ようやく70代の男性1人を含む、計5人を確保して発足することができた。このコースの目玉は、私が会長を務める一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会から、まちづくり人材である「地域プロデューサー」の資格が与えられることである。

コミュニケーションネットワーク協会は十数年前に地域プロデューサー養成講座を開始し、近年は東京家政学院大学を会場に開催してきた。ところが協会内部の事情とコロナ禍のため、3年ばかり休止しており、大学側からの提案は渡りに船であった。

開講までに時間のなかった昨年と違って、本年度はかなりゆとりがある。昨年末からチラシを準備して関係者に配布することにした。思いがけないハードルは、高齢の女性では4年制大学を卒業した人が少ないことだった。大学院のコースなので、4年制大学の卒業証明書が求められる。ある女性からは、自分の周りには大卒女性が少ないので、多くの人に呼び掛けることは難しいと断られてしまった。

本年は7人の受講生を得てスタートした。性別や年齢は不問だが、残念なことに男性の応募者はいなかった。驚いたのは、フルタイムで働いている女性が2人いたことだった。1人は時間休を取って来ている。1週おきに1コマ100分の授業

2コマなので、休む日数はそれほど多くはない。かつては就業時間中に休みを取って大学に行くことなどとうてい不可能だった。働き方改革が着実に進んでいることを実感させられる。

もう1人は、育児休業中の女性である。岸田文雄首相は、育児中にリスキリング（学び直し）をしてキャリアアップにつなげることを提案して、「育児は、そんなに簡単なものではない。実態がまったくわかっていない」と大いに響感があったものだ。しかし、実際に学び直しを始める女性がいることは、とても頼もしい。とはいえ、彼女が大学に來ている間は、母親に育児を任せているというのだから、誰もができるというわけではない。リスキリングは、もっぱら中高年を対象に、新たなスキルを身に着けてキャリアアップすることと捉えられているようだ。しかし、必ずしもキャリアに結びつける必要はない。学び直しは、長い人生のこれからを考える絶好のチャンスにもなり得るのである。



「実家の茶の間」 日誌 (2020年2月～2022年10月)

み～んなで生きてこ

篠田 昭

「何をしてもいい、何もしなくてもいい」——

空き家を改修して2014年に活動をスタートした、新潟市の基幹型地域包括ケア推進モデルハウス「実家の茶の間・紫竹」（代表・河田珪子氏）。ここを拠点に、たくさんの人と人とのつながりや、主体的に助け合う関係が生まれています。

市長としてこの施策を推進し、退任後も自称「茶の間の応援団」として紫竹に通う著者が、コロナに立ち向かった2年半余りの紫竹の日々を綴りました。

実家の茶の間・紫竹は、今年10月で9周年を迎えました。



篠田 昭 著
幻冬舎（幻冬舎ルネッサンス新書）
990円（税込）

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

● さわやか活動日記（抄）



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2023年8月1日～8月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (57件)

(都道府県別50音順)

北海道	千葉県
小笠原 一造	石井 敏夫
小田 桂子	磯山 博
澤出 桃姫子	伊藤 實
竹腰 久留美	川口 清
宮城県	杉谷 充行
小野寺 寛	関 義信
山形県	中戸 幹郎
荒井 智子	堀内 正範
茨城県	松下 明子
津田 敬子	東京都
渡辺 英勇	池崎 芳博
埼玉県	石井 孝彦
山田 礼子	石関 里英
	伊東 雅子
	岩田 典子
	石見 光夫
	川上 五郎
	志藤 洋子
	高田 富士雄
	永田 美樹
	山本 学
	神奈川県
	内田 友昭
	奥山 充
	塩見 治雄
	谷口 浩章
	丹 直秀

さわやかパートナー法人 (12件)

(50音順)

藤井 宏昌	丹下 多榮美	奈良県
湯山 みはる	京都府	中国 英明
新潟県	片山 千香子	高知県
佐藤 英夫	中村 純三	永井 美保
福井県	大阪府	福岡県
武藤 功士	石尾 雄幸	井上 稔信
静岡県	藤田 宣子	岩城 勝正
稲葉 ゆり子	和田 裕	潮 ハルミ
愛知県	兵庫県	小柳 眞澄
大橋 道彦	多田 睦美	坂田 美代
久保田 久代	安田 隆行	水島 孝司
かながわ信用金庫		
ボランティアサークル「ふれあい」		
認定NPO法人きらりびとみやしろ		

一般ご寄付 (1件)

(50音順)

蘭牟田 忠男 (1万円)



さわやか活動日記(抄)

column

協議体の活動を行政・SCがサポート 工夫のある取り組みが進む

■ 埼玉県本庄市 ■ 担当 共生社会推進リーダー 岡野 貴代

9月5日、「本庄市第1層、第2層生活支援体制整備事業 協議体構成員勉強会兼交流会」が行われ、当財団が講師として協力した参加者25名、同県深谷市より8名の見学もあった。

第1層、第2層ともに活発な活動を行っている同市の協議体だが、第1層と第2層、また第2層同士の情報共有によって必要なヒン

トを得ることを目的に、今回の勉強会兼交流会を実施した。

第一部では、財団の講演であらためて生活支援体制整備事業について学び、講義での気づきや感想を協議体メンバーで共有し、発表した。

発表では、「地域の支え合いと聞くと背伸びしてしまうが、できることから始

地域支援事業の活動報告は、このページのほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SCⅡ生活支援コーディネーター



めていくことが大事」「男性が外に出てこないのはどこでも課題のようだが、地域の行事やイベントには来るので目的や役割があると外に出やすいのでは」「介護保険サービスを利用するようになると集いの場を利用しなくなるが、集いの場は地域とのつながりを維持するという良さを周知する必要があるのでは」「買い

物支援は、買い物だけが目的ではなくおしゃべりできることが楽しみ。つながりが大切であるとあらためて感じた」「集まる場をつくるのがゴールだったが、その先の生活支援の仕組みづくりまでつながるような流れをつくりたい」といった意見が出て、感想を共有することにより助け合いの必要性や課題などが整理できたようだった。

その後、協議体をごちゃまぜにして深谷市の参加者も入った交流会を実施。



本庄市で行われた勉強会兼交流会の様子

5班に分かれて意見交換を行い、現在の活動や課題などを共有した。得られたヒ

ントは各自持ち帰り、新たな課題や疑問等はアンケートに記入してもらい、行政・SCが必要に応じて回答することとした。

30分ほどの情報共有で協議体を越えて交流し、それぞれに参考になったのではないかと感じている。

* * *

本庄市の第1層協議体は、「交通移動支援チーム」と「地域支え合い活動支援チーム」に分かれて活動している。「生活

支援サポーター養成講座」も毎年開催し、修了者は第2層協議体の活動のサポートや個別ニーズのサポート等につなげている。

また最近では、第1層協議体「地域支え合い活動支援チーム」の中で住民同士の助け合い活動の第一歩として「ごみ出し支援」が挙げられたため、それを同市内児玉地区の第2層協議体につなげ、地区内の民生委員にごみ出し支援についてアンケートを取った。その結果、「実際に困っている」「すでにごみ出し支援をしている」等の回答があったが、「中学生に支援をお願いできないか」との意見があり、第2層協議体で話し合いを行い、実際に中

学生がごみ捨て支援を行っている同県鶴ヶ島市に現場視察に行くことになったという。

こうして第1層・第2層協議体が連携して取り組み、独自の工夫も凝らした取り組みが行われているのには、行政が活動に寄り添いサポートしていることが大きいと、第1層SCの江原裕美氏は話す。

協議体のやる気を行行政やSCが十分に生かし、一つ一つ着実に活動を進めている本庄市。今後の動きに注目したい。



静岡！ SC情報交換会

■静岡県 担当 共生社会推進リーダー 澤 美杉

さわやか静岡県ブロックで、今年度のSC情報交換会を企画している。企画メンバーは、さわやかインストラクターと同県内のSCなど約10名。5月に、当財団も参加して情報交換会について大まかな意見を出し合った。「第1回打ち合わせ会議」というような仰々しいものではなかったがこの5月の会合で多くのコンセンサスが得られたことはとても重要だと思っている。

①今年度は、あまり背伸びをせず、年1回の開催とする、②開催前の打ち合わせ

せを十分に行い、当日を迎えよう、③県や県社会福祉協議会が行う研修とはしっかりと役割を分けよう、④この情報交換会を通じて、後々、参加者同士が連絡を取り合える関係性を築けるものにしよう、⑤参加者同士が本音をさらけ出せるものにしよう、というものだ。特に自治体という枠を超えた横のつながりづくりについては、その必要性を痛感しているようで、「SCは社協の職員である場合が多いが、社協所属ではないSCともつながっていくことが大切だ」という意見も出

た。

そして、迎えた第1回の打ち合わせは7月24日。集まったのは8名。皆さん、業務だけでもお忙しい中、時間をつくって参加してくださることが本当にありがたい。今年度の情報交換会のテーマは「広報」に決定。SC業務の中でも地域の皆さんにどう情報を伝えるのか、悩むことが多いという子・孫世代にはSNSがいい？ 動画投稿サイトのほうがいい？ 高齢者には回覧板やポスター、チラシ？ などなど、さまざまに工夫を凝らしているという。伝えたいことがたくさんある。その中から自分なりに重要なことや伝えたいエッセンスを選んで、チラシなどを

作成しているが、本当にこれでもいいのだろうかと不安になるとのこと。これは、県や県社協の研修でも取り扱っていないテーマで、SC情報交換会だからこそ実現できることだ。当日は、参加者自身がこれまでにつけたチラシなどを持ち寄って情報交換、講師からアドバイスをもらえるといいね、というアイデアも出た。――〇〇さんに講師になってもらえないだろうか」「対面開催なので、アクセスを考えると静岡市開催？」「打ち合わせ会議に講師も一緒に参加してもらって、どんな研修会にしたいのか直接思いを伝え、研修会の企画内容を講師と一緒に考えたい」など、企画メンバ

1から積極的な意見が出てきた。その後、講師との交渉は企画メンバーが骨を折

つてくれた。開催日は来年1月31日に決定。

私は、今年度の情報交換

会は間違いなく素晴らしいものになると確信している。多くの皆さんが参加し、参

加者同士の新たなつながりが生まれ、そして育まれることを強く願う。

各地・各事業の取り組みをご紹介します

生活支援・介護予防サービス協議体会議 認知症をテーマに地域課題について協議

■大阪府岬町

【8月4日】岬町で「令和

5年度第1回 岬町生活支援・介護予防サービス協議体会議」が開催され、行政、町社会福祉協議会、地域包括支援センター、SCと、協議体会議構成員19名が参加。当財団も協力した。

前回の振り返りを行った後、第1層協議体で今後取り組む予定の地域課題「認

知症について」をテーマにグループワークを行った。

活発な議論の後の全体発表では、認知症の人への対応について、「危険なことがなければ見守ることしかない」「家族だけで解決したい」という意見もあったが、「男性が行きたくなるような特色のある居場所がある」とい「等の意見も出た。また、認知症につい

での正しい知識を地域住民に身に付けてもらうことが大切であり、認知症の人が集まれる地域のプラットフォームをつくるなど、組織づくりも重要になることを確認した。

同町のSC中家裕美氏より、認知症の人と家族を支援するやさしい地域づくりの取り組みとして「まち歩き見守り声掛け訓練」実施に向けての概要が説明された。今後、実行委員会を立ち上げて令和6年5月頃に岬町全体として取り組んでいく予定であるとのこと。



岬町協議体会議でのグループワークの様子

まとめとして財団・目崎

より、「まち歩き見守り声掛け訓練」について、医師会、病院、消防、警察と連携しながら、自治区で見守りができ、認知症の人が社会とつながることが大切であること。特に、認知症の人を受け入れる地域の場、高齢者の異変に気づける場、認知症の人が自分の得意なことを生かせる場が必要。また、認知症の人の家族がSOSを出せるように地域とつながりを持つことも重要。最後に、認知症は誰にでも起こり得ることであり、認知症について地域全体で学び、一緒に助け合える素地をつくる必要があると伝えた。

(目崎 智恵子、三浦 里沙)

地域支え合い 住民チーム懇談会

「居場所」と「生活支援」の立ち上げを目指して



■ 神奈川県湯河原町

【8月29日】湯河原町で「地域支え合い 住民チーム懇談会」が開催され、町民9名、協議体メンバー2名、第1層SC、町担当者、県担当者が出席。神奈川県のアドバイザー派遣事業として、当財団の丹、鶴山、大方、神奈川県のさわやかインストラクター島津禮子氏が協力した。

湯河原町は、今年3月に住民懇談会を開催。アンケートで地域の支え合いに関心を持った人約20名を住民チームとし、5月には第1層SCの野田美恵子氏が1回目の住民チーム懇談会を

行っており、今回は2回目。アンケートで関心の高かった「居場所」と「有償ボランティア」をテーマに具体的な立ち上げに向けての1歩を踏み出すこととした。

まず野田氏が前回のまとめとして、取り組んでみたい活動や目指す地域像について共有した。また、目指す地域像をイメージするためのキャッチフレーズ案が5つ挙げられ、今回のアンケートで参加者に選択してもらったようにしていた。

住民チームの一人は前回懇談会の後、さっそく自身が住むマンションで、ちょっとしたお手伝いの活動を

するチラシを配布し動き出していた。現在の悩みは、住民のニーズを集めて活動を企画する機会や場所がないことだと話があった。

続いて、財団・鶴山より「助け合いの仕組み」と題して講演。居場所と生活支援（有償ボランティア）について、それぞれの意味と仕組みについて説明し、事例紹介とともに立ち上げのノウハウを伝えた。

その後、それぞれの関心に応じて「居場所」と「生活支援」のグループに分かれ、今の思いや悩みを話してもらった上で、今後どのようにに助け合いを進めてい

くか話し合った。居場所グループには島津氏、生活支援グループには鶴山が入り、進行やアドバイスを行った。

居場所グループでは、高齢者でつくった健康やいきがいを軸にしたグループ「たのしもう会」です。すでに自助や互助を学んでいるが、なかなか実際の行動に移すきっかけがない、との悩みを挙げた人がいた。また、昨年より、認知症の人やその家族を対象にした「あおぞらカフェ」を立ち上げたという人もおり、今後は多様な人に来てもらえる場所にしたと話していた。島津氏から、自身が立ち上げ住民と一緒に運営している同県横浜市の居場所「ふらっとステーション」の資料

を基に、立ち上げや住民への働きかけについて伝え、参加者からは活発な活動の様子に驚きと感心の声が上がっていた。また、居場所に適した空き家の情報や、地元の人を呼び込めるような情報が欲しいという意見も出ていた。

生活支援グループでは、すでにちょっとしたお手伝いを行っているという住民がいたが、「生活支援は頼む側からすると誰にでも頼めるわけではないし、行政で支援が必要な人をリスト化しコーディネートしてほしい」との意見も出された。野田氏より、町が何とかしてくれると思っていることはあるかもしれないが、町がやりきれないことがある

ので、住民の皆さんだからこそできることは住民で取り組んでほしいと伝えた。

鶴山より、全国には行政に頼らなくても住民主体で取り組んでいるところはたくさんあると伝え、財団の『助け合い活動創出ブック』を活用し、有償ボランティア立ち上げのステップを紹介。あつたらいと思われるサービスを並べるのではなく、「できるときにできることを」というスタンスで仲間を増やし、さまざまなニーズ（依頼）にどう応えていけるか、仲間と話し合い取り組んでいくことで活動が広がる、と話した。話し合いが進むうちに、「手助けを頼みたくても、頼み方が分からない」など



湯河原町の住民チーム懇談会の様子

活発な意見交換が行われ、終了後、連絡を取り合って新しい動きを始めていこう、と盛り上がった。

最後に両グループからまとめが発表され、鶴山から、



情報・調査事業

調査政策提言プロジェクト

「広がれボランティアの輪」連絡会議

新たな試みも取り入れた関係省庁との懇談会、盛り上がり時間が足りませんでした

【8月2日】「いつでも、

どこでも、誰でも、気軽に、楽しく」ボランティア・市民活動に参加できる環境・気運づくりを広げるため、ボランティア・市民活動を全国的に推進する54団体がゆるやかにネットワークを

「今後も住民同士で話し合いを続け、助け合いの動きにつなげていけたら」と伝えた。

（鶴山 芳子、大方 彩友美）



組む「広がれボランティアの輪」連絡会議（以下、「広がれ」）。当財団は勉強会プロジェクトチームのメンバーとして、その普及・啓発に向けた勉強会などを企画・運営している。

毎年8月2日に開催して

いる「ボランティア・市民活動の推進に関する関係省庁との懇談会」もその一環である。今年も午前と午後、2つのテーマに沿ってプログラムを組み立て、全日通霞が関ビルを会場に、ハイブリッド方式により開催した。

午前の部のテーマは「官民連携で災害からどう身を守るか」。内閣府政策統括官（防災担当）付から避難所の環境整備に向けた取り組み、厚生労働省社会・援護局地域福祉課から平時の福祉施策と災害対応のつながりに関する施策が紹介された。

広がれ構成団体からは、勉強会プロジェクトチームの日本YMCA同盟総主事

の田口努氏が、災害時には行政とは違った民間の柔軟なコーディネートシヨン力、ファシリテーター力が大切であり、現場視点の工夫と日常の顔の見える関係の重要性が語られた。

後半は、環境省環境再生・資源循環局災害廃棄物対策室と国土交通省水管理・国土保全局治水課から事業紹介をいただき、進行役の原田正樹副会長（日本福祉大学学長）が、知ること、ボランティア・市民活動団体ができることのきっかけにさせてもらえる機会になったと午前中をまとめた。

午後の部は「子ども・若者のWell-beingのために」をテーマに、永田祐幹事（同志社大学教授）

が進行。こども家庭庁長官
官房参事官(総合政策担当)
付から、こども家庭庁の取
り組みとこども政策の概要
について、特にこども・若

者の意見反映の仕組みづく
りの中で1万人を目標に
「こども若者★いけんぶら
す」事業が動き出している
様子や、官民及び民間同士
の対話・連携・協働を図る
ことを目的に、「こどもま
んなか社会実現プラットフォーム」を今年度中に設立
する予定である旨の説明が
あった。

文部科学省初等中等教育
局児童生徒課からは、いじ
め・自殺・不登校の実態と
フリースクール、不登校特
例校の事例が紹介された。
自殺対策はこどもの自殺対

策緊急強化プランとして、
こども家庭庁等とも連携し
ながら体制強化を図ってい
るとの説明があった。

広がれ構成団体からは認
定NPO法人チャイルドラ
イン支援センター事務局長
の向井晶子氏より、活動開
始以降24年間実施してきた
電話相談、最近のオンライン
チャット相談と24時間ホ
ームページ上から匿名で書
き込める場所「つぶやく」
の紹介があり、活動を通じ
て誰かに気持ちを言っても
いい、話を聴いてもらえる
という、子どものありのま
まが肯定される居場所の必
要性が語られた。

後半は、法務省保護局更
生保護振興課、文部科学省
総合教育政策局男女共同参

画共生社会学習・安全課、
内閣官房孤独・孤立対策担
当室からの取り組み状況の
説明後、ネットワーク、プ
ラットフォーム等の言葉が
屋上屋を架すことのなきよ
う、しつかり重なり、連携
していくことが必要だと永
田幹事がまとめた。

また今回、初の試みとし
て、午前・午後ともに、冒
頭に発表いただいた省庁の
お二人を囲んで広がれ構成
団体が2グループに分かれ、

各団体の紹介や国の施策と
の連携のあり方など関連な
情報交換を行い、当初予定
した時間では足りないほど、
いずれのグループも盛り上
がる内容となった。

最後に総括コメントとし
て、上野谷加代子会長(同
志社大学名誉教授)が、
「我々はボランティアで前
を向く集まりであり、今後
もこうした制度を学んで知
恵を生かしていきたい」と
まとめた。(上田 恵子)

第1回 かながわコミュニティカレッジ 運営委員会に出席



【8月7日】「令和5年度
第1回かながわコミュニ
ティカレッジ運営委員会」
が、かながわ県民センター

で開催され、委員として出
席した。議題は、1・令和
5年度の運営委員会の進め
方、2・令和4年度コミュ



ニティカレッジ(以下、「コミカレ」)講座実施結果について、3・令和5年度コミカレ運営業務の実施状況について、4・令和6年度コミカレ講座編成の考え方について。最初に、新座長として青山学院大学コミュニティ人間科学部教授の伊藤真木子氏が選任され、議事を進行した。コミカレでは毎年、30ほどの多様な分

野の講座が年間を通して開催されているが、特に傾聴講座と発達障がい児地域支援コーディネーター養成講座は人気が高く、また、受講生が地域でボランティアグループを立ち上げて活動しているとの報告もあった。そこで、受講後の地域での取り組みにつながっている様子を、ホームページをはじめとするさまざまな手段で発信してはどうか、と財団から提案した。

神奈川県では、基本構想の検討にあたり、①少子高齢社会、人口減少社会への対応、②予測が困難な時代への対応、③神奈川の特徴を生かしたまちづくり、の3点を県政の課題と位置付けており、その解決のため、

NPOや地域、企業など多様な強みを持つ主体の力を結集し、多彩な人材が集まる神奈川ならではの支え合いによって課題を克服していくことを目指している。その中で、令和6年度の講座編成の考え方については、方向性が合致する「地域で

の助け合いが広がる社会づくりを目指して」をメインテーマとして継承・発展させたい、との説明が事務局からあり、神奈川らしさや予測困難な時代への対応などについて活発な議論を行い、全員一致で合意した。

(鶴山 芳子)

かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進委員会

計画評価部会に出席

【8月21日】「かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進委員会 第37回計画評価部会」がオンラインで開催され、委員として出席した。議題は、(1)「かながわ高齢者保健福祉計画(2021(23年度))」介護保険事業の実績について、(2)次期かながわ高齢者保健福祉計画の構成について。

神奈川県高齢福祉課長のあいさつに続き、橋本廸生部会長(横浜市立大学名誉教授)の進行で議論した。議題(1)について事務局

から骨子案の説明があり、受診控えなどコロナ禍の影響が見られるのではないかなどの意見も出された。議題(2)は、第9期の計画案についての事務局説明を受け、議論した。これからますます進む人口減少社会において、介護人材不足、看護体制の問題、質の担保など高齢者を支える社会の状況について議論すべきではないかという意見や、認知症基本法に基づく認知症者

との共生についての意見など活発な議論がなされた。

当財団からは、地域づくりの観点からと、高齢者中心の事業ではあるがすべての人を対象に働きかけることが重要であること、地域との連携や多様な事業連携の必要性等について意見を述べた。時期高齢者保健福祉計画は、骨子案を基にした議論を踏まえ、11月頃に素案が出される予定。

(鶴山 芳子)

事務所 だより

● 今月2日からスタート予定の「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」。現在、最後の事前確認に大わらわで取り組んでいるところ。これまで3回実施してきたサミットの提言を、地域でどう実践につなげていけばいいか、ぜひとも皆さんの活動の参考にしてみてくださいよう、一同頑張っています！

いきがい・助け合い オンラインフェスタ2023

打ち合わせや収録の様様を
ちょっとご紹介…



近藤克則さんの応援メッセージは大学で収録、清水理事長と打ち合わせ(写真左上)

みんなのひろば

村田さんのエッセイ
人生の指針です

佐藤 須美子さん 87歳

福岡県

『さあ、言おう』は、私の生きざまとこれからの指針になります。

村田幸子先生の「老いの暮らしを創る」は、毎月大変楽しみです。連載には、大変な実績と熟慮された事象が、面白おかしく、かつ有意義な内容で飛び込んでまいります。私の後半人生の大切に有意義な指針となります。知人・友人たちにも伝達させていただきます。村田先生が70歳の頃、福岡会場で講演を拝聴しまして記憶に残っています。

8月号の車の運転免許については、勇敢で頼もしく同感いたします。私は子育ての最中33歳で必要に迫られて免許を取得し、ゴールド免許です。2か月前に更新しましたが、高齢者

研修では実技があり、認知機能検査も大雑把には心配ありませんでした。テストは、3年前は75点でしたが、今回は84点でした。何の予習もしませんでした。記憶力が落ちていなかったことが不思議でした。思い返せば、コロナ自粛で厳しい生活でしたから、私は手当たり次第に手芸を試みました。その結果が招いてくれたことと思います。

やはり、何かに真面目に全力投球することが、後期高齢者には特に必要だと実感します。僭越ですが、村田先生より4歳上の高齢を大病なく迎えています。その底辺には、さわか福祉財団で多くを学び、実践できました。もちろんあります。

村田先生、清水理事長、スタッフの皆様へ心から御礼を申し上げます。

長く地域でご活躍されてきたからこそですね。無理せず、これからも生涯現役で！

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。ぜひ皆様の声をお寄せください。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

投稿募集

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます（さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から

はり絵・池田げんえい

「秋爽」
萩山高原（岡山）



編集後記 ●地域での助け合いが“非定型のつなぎ”として重要な機能を担っています。専門職との連携をさらに進めましょう（P2～「巻頭言」）。●「こんな活動やっています！」は、認知症サポーターの力を生かして生活支援の仕組みをつくった岩手県矢巾町の取り組みです（P4～）。●寺子屋の懐かしい取り組みが、地域子どもたちの原風景として残れば素晴らしいですね（P8～「子どもと一緒に地域で輝こう」）。●長い人生を豊かにする「学び直し」について、袖井さんが書いています（P18～「人生100年時代を生き抜く知恵」）。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

金澤
泰子



●金澤翔子の母・書家

高台の部屋に引っ越した。東西南北・360度空しか見えない。星、雲、月、太陽、風。悠久の宇宙の中でオリオン座に興奮し、満月に手を合わせ昼は雲の大スペクタクルに目を見張り、涼しい風に涙ぐみ。天空に夢中です。

ダウン症の娘が健気にも单身、
街に出て一人暮らしをして八年になる。

不安に満ちた旅立ちであった。

けれど街の人々は知的障害を持つ娘を支えてくれた。

この現実には「この世は優しさに満ちている」と深く感じた。

さあ、10月号

通巻362号 2023年10月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
レイアウト 菊池ゆかり
印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

みんなで地域共生社会をつくろう

「地域助け合い基金」で

あなたの気持ちを助け合いの力に生かしませんか？

こんなふう
に役立っています！
皆様のご寄付

居場所づくり

学校に行かない子たちの



愛知県
春日井市

代表者の自宅から活動を開始した後、古い空き家を借り受け協力者も増えて、学校に行かない子たちが他者と関わり自分を表現できる居場所に

空き家のエアコン、電気カーペット代を助成

長崎県
佐世保市



一体的に提供

外出と生活の支援を

行政の施策を待つだけでなく住民自ら地域課題に立ち向かおうと、交通が不便な地域で外出支援や生活支援の活動に取り組む。住民に喜ばれ、利用が増加

外出支援のための講習費用、備品費、マッチング調整費等を助成

多世代の居場所に

公共の農園を借り受けて



茨城県
つくば市

一人暮らし高齢者や引きこもりの人の増加を危惧し、農園を交流の場に。気になる人の家を訪問して相談に乗ったり、子どもや大学生も参加する活動に発展

農作業用具、種苗、肥料等の購入を助成

ご支援、ご寄付をどうぞ
よろしくお願いいたします。

「地域助け合い基金」へのご寄付の詳細は、当財団ホームページをご参照いただくか、下記までお問い合わせくださいますようお願いいたします。

<当財団ホームページ「地域助け合い基金」ページ>

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/community-fund/>

<お問い合わせ>

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

財団ホームページ内
基金関連ページ

